わが市を語る 1

氷見市（富山県）

氷見市長 林 正之

「人 自然 食 文化で未来を拓く交流都市」を目指して

富山湾越しに望む立山連峰

氷見市は、富山県の北西部、能登半島の基部に位置し、東は富山湾に面しています。緩やかに弧を描きながら長く伸びる南北約20㎞の海岸線一帯は、能登半島国定公園に指定されています。

令和4年8月に市制施行70周年を迎えた本市は、本年5月に内閣府の「SDGs未来都市」に選定され、「人 自然 食 文化で未来を拓く交流都市ひみ」の実現に向けて、本市の特性や地域資源をさらに生かしながらSDGsを推進し、持続可能な社会を目指しています。

美しい景観と豊かな食文化

氷見海岸から海越しに望む雄大な立山連峰の風景は、世界からも評価され、ユネスコが支援する「世界で最も美しい湾クラブ」に富山湾が加盟しています。立山連峰と富山湾が織りなす大パノラマは、世界でも稀有な景観であり、多くの人を魅了しています。

海から里山まで広がる豊かな自然は、「ひみ寒ぶり」をはじめとする海の幸だけでなく、四季折々の里山の幸など、一年を通じて多くの恵みを私たちにもたらしてくれています。この豊かな自然環境の中で、400年にわたり受け継がれてきた本市の定置網漁業は「氷見の持続可能な定置網漁業」として、令和3年2月に農林水産省の「日本農業遺産」に選定されました。自然に優しい漁法である定置網漁業は、魚を傷つけず捕り過ぎることもない、資源の持続的利用が可能な「サステナブルな漁業」であります。

「天然のいけす」と呼ばれている富山湾は、水産資源が豊富で約500種もの魚が生息しており、氷見漁港には、四季を通じて多種多様な魚が水揚げされています。春にはイワシ、夏にはマグロ、秋から冬にかけてブリが多く水揚げされており、ブリは昔から献上品にも使われ、今も「ひみ寒ぶり」として全国に流通しています。イワシは「氷見鰯」として広辞苑にも掲載されています。

本市は里山の幸も豊富で、とりわけ「氷見牛」は、きめ細やかな霜降りで上品なうまみと甘みが味わえると評判です。稲積梅やハトムギ、灘浦みかんなど、本市の気候風土に適した品種が栽培されているほか、中山間地域に広がるブドウ畑で収穫されたブドウから、地元の食材によく合うワインが醸造されており、氷見らしい食文化が育まれています。

富山湾の王者「ひみ寒ぶり」

外部人材の活用と手厚い子育て支援

本市では、外部人材を積極的に活用しており、令和2年2月には、北陸で初となる副市長の一般公募を実施しました。全国から

810人の応募があり、元TBSディレクターを採用しました。移住者目線で氷見の良さを発信する市政番組「サンデーひみ」は、副市長が編集長として企画から番組MCまで務めており、YouTubeで全国にも発信しています。

令和4年10月にオープンした氷見市芸術文化館の総合プロデューサーも、一般公募で採用しました。全国的なアーティストの招請と市民の利用を両立させながら、施設の稼働率は、5月末現在で70%以上となっています。氷見市ビジネスサポートセンター長や訪日観光コーディネーターなども一般公募で採用し、本市の活性化にご尽力いただいています。

安心して子育てができる環境づくり

氷見に春を告げる「まるまげ祭り」

このほか、市内の若い世代が、安心して出産・子育てを行い、将来にわたり住み続けられるよう、「子育てしやすいまち日本一」を目指しています。

令和5年度からは、1歳児および2歳児の保育料を第1子から完全無償化したほか、保育所などに預けず家庭で子育てを行う世帯への「家庭で子育て応援金」も第1子から支給しています。

また、「子ども医療費助成制度」の対象を高校生相当まで拡充するなど、安心して子育てができる環境の充実を図っています。

伝統文化の継承とまんがを生かしたまちづくり

本市には、古くから伝承されている祭りや獅子舞があります。着物姿で丸まげを結った女性がまちを練り歩き、幸せな結婚を祈願する「まるまげ祭り」や、華麗な曳山（ひきやま）がまちを巡行する「祇園祭り」は、歴史情緒が感じられる祭りです。春と秋、市内各所の神社で奉納される獅子舞は、地域ごとに舞い方が異なり、親から子、子から孫へと受け継がれています。

また、本市は日本まんが界の巨匠・藤子不二雄Ⓐ先生のふるさとであり、市街地には、キャラクターのモニュメントが多数（63体）あるほか、氷見市潮風ギャラリーでは、貴重な原画などを鑑賞できます。

令和2年には、中国浙江省寧海県や台湾高雄市鼓山区と友好交流都市協定を締結し、交流を深めています。

本市の明るい未来に向けて「氷見ならではの良さ」を大きく花開かせながら、国内外との積極的な交流・連携を展開し、市民の皆さまがふるさとに対して自信と誇りを持ち、誰もが幸せに暮らせるまちを実現していきます。

プロフィール

◆**面積**　230・54㎢
◆**人口**　4万3588人
◆**世帯数**　1万7455世帯

〔将来都市像〕人　自然　食　文化で未来を拓く交流都市　ひみ

〔まちの特徴〕400年以上続く定置網漁で捕れる「ひみ寒ぶり」など、豊かな食文化に彩られたまち

〔特産品〕ひみ寒ぶり、氷見牛、うどん、稲積梅、ハトムギ、ワイン

〔観光〕海越しの立山連峰、ひみ番屋街、藤子不二雄Ⓐまんがワールド、氷見市海浜植物園、朝日山公園、柳田布尾山（やないだぬのおやま）古墳

〔イベント〕まるまげ祭り、ごんごん祭り、祇園祭り、ひみまつり、氷見食彩まつり、春の全国中学生ハンドボール選手権大会

氷見市長
林　正之

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 2

小平市（こだいら）（東京都）

小平市長　小林洋子（こばやしようこ）

「つながり、共に創るまち　こだいら」の実現に向けて

小平市は、東京都多摩地域の東北部、武蔵野台地にあり、都心から西に26㎞の距離にあります。

江戸時代中期の承応（じょうおう）3年、玉川上水の通水をきっかけに、江戸の近郊農村として開発が進み「小平村」が誕生しました。大正末期からの学園都市構想の推進とともに、次第に人口が増加し、戦後は都市部のベッドタウンとして開発が進み、昭和37年10月1日に「小平市」となりました。

市内には七つの駅があり、都心へのアクセスに優れている一方で、玉川上水や用水路、樹林地などの緑の空間が形成された住宅都市として発展してきました。

短冊型農地とブルーベリー

玉川上水が通水し、青梅街道や東京街道などの街道に沿って、短冊形の農地が整備され、今もその面影が残っています。これらの市内の農家からは、新鮮な農産物を市内の小・中学校にも納入しており、学校給食における地場産農産物の納入率は、都市部の市としてはかなり高く、小学校給食では30％を超えています。

また、夏は小平夏野菜カレーの日、冬は小平冬野菜煮だんごの日など、季節ごとに全市立小・中学校の共通メニュー日を作り、地場産農産物への関心を高め、季節の農産物を知り、旬のおいしさを味わうという食育に取り組んでいます。なお、小平夏野菜カレーは同日、市役所食堂でも楽しめます。

ブルーベリーワイン（左上）、東京ゴールド（右上）
小平梨（左下）、ブルーベリーエール（右下）

昭和43年に日本で初めて、商業用にブルーベリーが植えられた本市は「ブルーベリー栽培発祥の地」であり、夏には収穫体験や生の果実の販売が行われるほか、商店では1年を通してブルーベリーワインなどの加工品が多く売られています。このほか、市内で発見された新品種のキウイフルーツ「東京ゴールド」、都内でもトップクラスの収穫量を誇る「小平梨」、最近では人気の高い「シャインマスカット」など、多くの果樹も農家で栽培されています。

原始遺産「比類なき鈴木遺跡」

昭和49年の鈴木小学校建設時に発見された鈴木遺跡は、その後発掘調査が行われ、令和3年3月に日本を代表する後期旧石器時代の遺跡として国史跡に指定されました。

鈴木遺跡から出土した旧石器

鈴木遺跡からは約1万6000～3万8000年前の旧石器が出土しており、後期旧石器時代初頭から末葉まで連綿と続く12もの文化層を有する遺跡のため、鈴木遺跡一遺跡だけで、石器から見た南関東地方の後期旧石器時代の歴史の変遷が分かります。そして、黒曜石などの遠隔地石材を含む12万点以上の遺物の出土を含め、学術的価値が高く、東京都内では唯一となる旧石器時代の国史跡です。

本年3月には、鈴木遺跡が持つかけがえのない価値を後世に継承するため、保存・整備・活用などの方針を盛り込んだ「国史跡鈴木遺

跡保存活用計画」を策定しました。

今後も整備を行い、観光資源として市内外から人を呼び込んでいくとともに、地域資源として学校教育や生涯学習の場での活用が考えられます。

小平市大学連携協議会 ～こだいらブルーベリーリーグ～

平成25年に本市と市内の大学が、地域社会の発展と人材の育成を目的とした連携を進めるために設立した「小平市大学連携協議会こだいらブルーベリーリーグ」は、現在七つの大学などが参加し、意見交換や情報交換を図っています。

学生の地域に関する活動を応援し、大学の枠を超え、学生と地域をつなぐイベント「まちで楽しむ」は、学生団体による活動報告やディスカッションなどを通じて交流が行われ、「未来のこだいらをどうしたいか」なども話し合われています。

小平市大学連携協議会（こだいらブルーベリーリーグ）

なかまちテラス（仲町公民館・仲町図書館）

中央エリアの整備（プロポーザル提案時のイメージ図）

世界的著名建築家により生まれ変わる公共施設

本市では、全国の他自治体と同様に公共施設の老朽化が進んでおり、更新の時期を迎えています。

平成27年には、「金沢21世紀美術館」などを手掛け、プリツカー賞を受賞した著名な建築家である妹島和世氏が設計した、仲町公民館と仲町図書館の複合施設「なかまちテラス」が開館しました。この施設は、多様な幅広い世代の市民が集う生涯学習の拠点として、広く活用されています。

現在、市役所周辺の中央エリアでは、中央公民館、健康福祉事務センター、福祉会館を複合化して更新する事業が進んでいます。この事業は「国立競技場」の設計を手掛けた、著名な建築家である隈研吾氏が設計を行うとともに、ワークショップやオープンハウスで意見を伺うなど、市民参加で検討を進めており、市役所周辺が魅力あるエリアに変わろうとしています。

今後も、市の公共施設マネジメントの基本理念「いつまでもわくわくする場をみんなで創ろう」の下、延床面積の縮減だけではなく、魅力あるサービスの実現を目指し、長期総合計画に掲げた目指す将来像「つながり、共に創るまちこだいら」の実現に向けて、市民、事業者、行政がつながり、持続可能なまちづくりを推進してまいります。

プロフィール

◆面積　20・51㎢
◆人口　19万7068人
◆世帯数　9万6233世帯

〔将来都市像〕つながり、共に創るまちこだいら

〔まちの特徴〕都会の特性である利便性の高さと、田舎（ふるさと）のイメージに合った緑に囲まれた、学園都市かつ住宅都市

小平市長
小林洋子

〔特産品〕ブルーベリー、ブルーベリーのお酒・洋菓子・和菓子、キウイフルーツ「東京ゴールド」、うど、糧うどん

〔観光〕小平グリーンロード、鈴木遺跡資料館、平櫛田中彫刻美術館、ふれあい下水道館

〔イベント〕市民まつり、灯りまつり、産業まつり、グリーンフェスティバル、ブルーベリーまつり

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 3

津島市（愛知県）

津島市長　日比一昭

全国に向けて魅力発信中！「魅力マシマシ津島市」

尾張津島天王祭の巻藁舟

津島市は愛知県の西部、名古屋市の西方約16㎞に位置し、昭和22年3月、県内9番目の市として誕生しました。

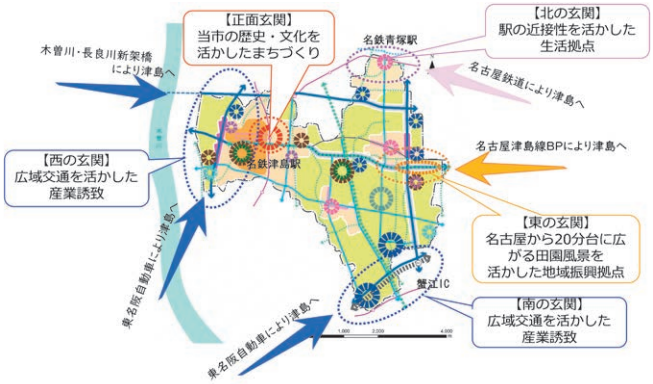
古くは津島牛頭天王社と呼ばれ、全国に3000以上点在する「津島神社」の総本社である津島神社の門前町として、また、交通・経済の要衝である湊町として、近世・中世を通じて繁栄しました。立地としては、名古屋まで電車でも車でも最速20分台で行くことができ、生活に必要なものや場所へのアクセスが良く、自然にもほどよく囲まれた、都会と田舎のそれぞれの良さを兼ね備えた「とかいなか」の暮らしを送ることができます。

四季を彩る、情緒あふれる祭り

津島市は四季それぞれに祭りがある「祭りのまち」です。春の「尾張津島藤まつり」、秋の「尾張津島秋まつり」など、華やかさと活気にあふれます。中でも、日本三大川祭りの一つに数えられる「尾張津島天王祭」は、数ある夏祭りの中でも最も華麗なものといわれています。津島神社の祭礼として600年近くの伝統を誇り、織田信長も見物した記録があります。「尾張津島天王祭の車楽舟行事」は、平成28年に「山・鉾・屋台行事」の一つとしてユネスコの無形文化遺産にも登録されました。7月第4土曜日に「宵祭」、翌日曜日に「朝祭」が行われます。宵祭では、多数の提灯をかかげた巻藁舟が、日本の歴史公園100選にも選ばれた天王川公園の池の中を悠々と進み、揺らめく提灯が川面に映るその姿はさながら絢爛豪華な時代絵巻です。

新たな津島市に向けて、まちづくり再生元年

本市では、本年度をまちづくり再生元年と位置付けました。活力ある魅力的な新たな津島市に向けて、リニア中央新幹線の開業を見据えた、本市へアクセスする道路や鉄道の整備促進を基軸に、津島駅周辺の「正面玄関」を含む東西南北に五つの玄関を配置し、交流人口や産業集積を高めていく「つしまゲートウェイ・プロジェクト」を開始しています。中でも、津島神社、天王川公園、そしてこれらをつなぐ商店街の天王通りがある津島駅周辺の「正面玄関」は、地域の魅力の核として「住む人に加え、働く人、訪れる人など、時間を過ごす人が絶えることなく持続的に存在するまち」を目指し、再生していきます。



つしまゲートウェイ・プロジェクトの概略図

その第1弾として、天王川公園においては、民間活力を活用するため、パークPFIを導入し、園

天王川公園にオープンしたスターバックスコーヒー

内にスターバックスコーヒーがオープンするなど、さらに魅力が向上しました。今後、第2弾、第3弾と市内全域で、本市の「価値」を高め、わくわくするまちなかを創出していきます。

日本一の子育て支援トータルプラン

未来を担う子どもたちは、津島市の「宝」です。本市では「子育て支援トータルプラン」として、子どもが生まれる前から産み育てるまで、丸ごと応援するためのさまざまな事業を実施しています。

「18歳までの子ども医療費完全無料化」をはじめ、「第2子以降の保育料の完全無料化」「保育所・幼稚園・認定こども園等に通う3歳から5歳児までの副食費の全額補助及び小学校・中学校給食費の全額補助」「0歳児を対象とした選べる無料定期便」「保育所・認定こども園等における使用済み紙おむつの保護者持ち帰りの廃止」など全国トップクラスの事業を実施し、安心して出産、子育てができる環境づくりを進めています。

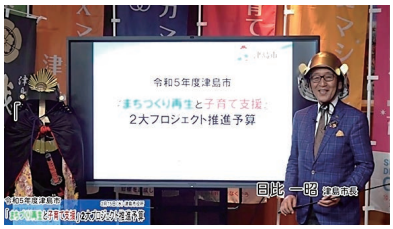
ロボホンを使ったプログラミング教育

日本一の特色あるプログラミング・国際教育

令和4年度より、AI機能を搭載した人型ロボット（ロボホン）とレゴブロックを市内全小中学校に、全国最大規模となる各校2種21機ずつ導入しました。「楽しくて役に立つ」を合言葉に、プログラミング教育を通して、創造力を養うとともに、理数教育にも関心を持つ児童生徒を育てていきます。

また、全小学校8校において、愛知県内にある八つの領事館との領事館交流プロジェクトを実施しています。このプロジェクトを通して、外国の文化に触れる機会をつくり、グローバル化する社会の中で他の文化圏の人や暮らしに親しみを持つことで、国際感覚豊かな子どもの育成を目指しています。そして、知・徳・体（確かな学力、豊かな人間性、健康・体力）のバランスのとれた「生きる力」を育む特色ある教育を進めています。

このような数多くの本市の魅力を、「魅力マシマシ津島市」をキーワードに積極的に発信しています。本市初の広報大使であるプロランナーの神野大地選手が出演する市のPR動画、市公式のLINEやInstagram、市長自ら出演するYouTubeのショート動画など、さまざまなプロモーションを展開していますので、ぜひ一度ご覧ください。



市長が出演するYouTubeのショート動画

プロフィール

◆面積　25・09㎢
◆人口　6万273人
◆世帯数　2万7148世帯

〔将来都市像〕～未来につなぐ～　住んでみたい　住んでよかったまち　津島

〔まちの特徴〕都会すぎず田舎すぎない、歴史文化が息づく魅力あふれるまち

〔特産品〕あかだ・くつわ、イチゴ、もろこの押し寿司、津島麩、地酒、太鼓

〔観光〕津島神社、天王川公園、堀田家住宅、清正公社、津島市観光交流センター

〔イベント〕尾張津島天王祭、尾張津島藤まつり、尾張津島秋まつり、開扉祭

津島市長
日比一昭

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 4

西予市（愛媛県）

西予市長　管家一夫（かんけかずお）

「暮らして『あんしん』が体感できる まちづくり」～チャレンジせいよ～

平成16年に五つの町が合併した西予市は、愛媛県の西南部に位置し、東西に長く、海抜0mの海辺から標高1400mの山間地まで、変化に富んだ景観が魅力の一つであり、全域が「四国西予ジオパーク」に認定されております。

活動センターへの挑戦

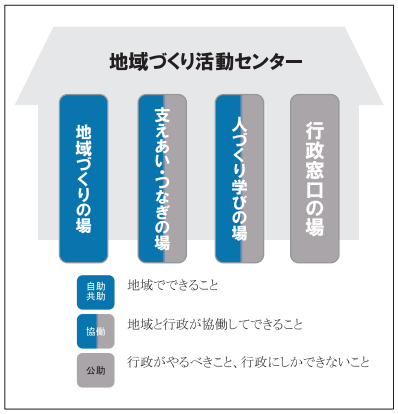
合併により広域な面積を有する事となった本市では、一律的な行政サービスでは、社会情勢の変化や多様な地域課題に対応できない状況となってきました。

そこで、平成23年度より課題解決型の住民自治（小規模多機能自治）を推進し、地域コミュニティが主体的に地域づくりを行う体制を整えました。

まず、合併当初の小学校区エリアに27の地域づくり組織を立ち上げました。各地域づくり組織の財源には地域の裁量により使い方を決定できる交付金制度を設け、行政職員を地域担当職員として配置することで、財源と人員による活動支援を進めました。十数年にわたる地域の特性を生かした活動により、確実に地域力が養われてきたように思えます。

具体的には、交付金事業の実績として、100事業を超える自主提案事業が実施され、地域課題の解決に向け貢献していただいております。

また、地域づくり組織の支援により、地域おこし協力隊の現役活動隊員数が27人（本年6月1日現在）となるなど、関係人口の創出においても効果が現れています。



活動センターのイメージ基本理念

常に市民と共に手をとりあって

地域づくり活動が活発になるにつれ、生涯学習の拠点施設である公民館から、地域づくり活動の拠点施設となる新たな体制への見直しの機運が高まり、平成27年度から新制度の検討が始まりました。

令和2年から市民検討委員会を開催し、14回に及ぶ協議検討を経て、令和4年3月に「西予市地域づくり活動センター推進計画」がまとまりました。準備期間を経て、本年4月から市内27カ所で地域づくり活動センター（以下「センター」という）がスタートしたところです。

全国のセンター化の多くは、指定管理者制度を導入した上で、行政職員が撤退する事例が見られるようですが、本市では、あえてセンターに係長級の行政職員を配置し、直営による地域を現場で支援する運営方針としました。

センターには地域づくり組織が雇用し、地域づくり活動に専従する地域任用職員が配置されました。この職員の雇用などに係る人件費等は交付金として制度化しました。市内27地域に地域任用職員が誕生し、さまざまな活動が展開され、地域と行政の協働による取り組みを加速化させています。

このような地域づくり活動を通じて、センターでは地域が元気に、笑顔になる取り組みを支援していきます。本市では持続可能

土居地域づくり活動センター

な地域づくりを目指して、市民との協働による地域づくりへの挑戦が始まったところです。

生産性向上を目指した「オフィス改革」の推進

本市では、人口減少からなる財政悪化、そして職員数の削減が進んでいます。そのような中、多様化する市民ニーズに対応するためには、従来の働き方の見直しといった生産性の向上が必要であり、その環境整備として、平成26年度からオフィス改革を始めました。

令和2年度には、新型コロナが流行し行政のデジタル化の遅れが叫ばれる中、これまでのオフィス改革を進化させ、デジタル化も進め、本庁舎にておおよそのフロアのオフィス改革を実施しました。

主な内容としては、書類の50％削減を目標に、脇机、書庫を一部撤去し、捻出したスペースをオンラインにも対応したミーティングエリアとして活用、電子決裁、フリーアドレス、ペーパーレス化を推進し、オンライン環境の整備とデジタル技術も活用したオフィスを構築しています。

また、全フロアを無線ＬＡＮエリアとし、パソコンがあれば場所を選ばず仕事ができる環境の整備を進め、現在では、支所および各地域の拠点施設である地域づくり活動センターにおいても無線ＬＡＮを整備し、サテライトオフィスとして業務が可能となっています。

窓口は、総合窓口を導入し、一部の証明書では、タブレットによるタッチ操作で各種証明書類が発行できるとともに、地域づくり活動センターでも各種証明書類の発行、また、オンラインでの相談ができる環境を整備し、デジタルを活用した市民サービスの向上に努めています。

オフィス改革では、これら外見的なハード整備だけでなく、ソフト面である意識改革も重要であるため、部長級による新しい働き方の議論を行い、「成し遂げたい目的を諦めない」など、これからの職員の働き方について、「部長のささやき」と題して、38項目を作成し、グループウェアにて全庁展開、新しいオフィスやＩＣＴの活用方法などについて、全員参加型の研修プログラムの取り組みも行いました。

これらオフィス改革により、職位や所属を超えたコミュニケーションも大きく増え、紙書類に埋もれる、長時間の会議、職位の壁といった「昭和な働き方」からの脱却を進めていきました。

今後、ますます多様化、複雑化する地域課題に対応するためにも、課題を解くアイデアや地域を魅力的にするアイデアを出し、意思決定のスピードアップ、成果の質の改善を図り、市民サービス向上、職員負荷の軽減を目指していきたいと考えています。

部長のささやき（抜粋）

プロフィール

西予市長
管家一夫

◆**面積**　514・34㎢
◆**人口**　3万4786人
◆**世帯数**　1万7471世帯

〔将来都市像〕「暮らして『あんしん』が体感できるまちづくり」

〔まちの特徴〕リアス海岸・盆地・カルスト台地などの変化に富んだ地形が特徴

〔特産品〕かんきつ類、魚介類、米

〔観光〕卯之町の町並み（国重要文化財）、宇和米博物館、四国カルスト・大野ヶ原、四国西予ジオミュージアム

〔イベント〕野村乙亥（おとい）大相撲、全国「かまぼこ板の絵」展覧会

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。